

先輩から後輩へ

昭和57年度生徒会長
鈴木 善雄 (57回)

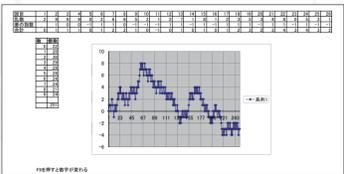


校舎改築工事前の生徒会室に入ったのは久しぶりだった。ついこの前までここにいたような気になったのはほとんど変わらないこのたたずまいの為だろうか。私達が在学していた千南祭のポスターがまだある。私達の時が最も古くその後つい4、5年前位のものまで貼ってあった。古い物は新しい物に変えたらよさそうだが、古い物はそのままに新しい物と並べて存在させるのは横の深さである。

変わらないことは努力の中にある。新しく、進歩してゆくこと変化してゆくことがずばらしいわけではない。現状を改善してゆく努力こそが大切だと思う。現状を見て何もしないと変わらないのか。否、何もしないと流れの方向が変わってしまうのである。貼ったままのポスターが色褪せてしまうように変わるのである。流れとは曖昧なものではない。ある方向に進む力である。例えば0から9までの乱数を表にする。前の数より大きいと+1小さいと-1同じは0としてグラフを書くとき驚くことに流れが発生する。無機に並んでいるので0付近をマークするかと思えばそうではない。プラス側やマイナス側に大きく傾くこともあるのである。流れなんてと思う人もいるであろうが、スポーツやゲーム、カジノにも確実に流れがある。乱数にも流れがあるのだから人の行うことに流れが必ずある。問題はこの流れをどうするかである。スポーツと言えば流れが自分にある時は攻撃的に動き得点を狙う。流れが相手にある時はガマンして守りに徹し失点しない。流れが変わるのを待つのである。流れは変わってゆきいつでも自分の味方ではないがいつまでも逆流でもない。その変わりゆく流れ、状況に対しどう対処するか。その一つが待つことである。

待つことは難しい。どうしても手が出てしまう。ここぞという時まで待てない。あわてて手を出しても良いことは何一つない。わかっていてもできない。待てないのは積極性の現われなどと自惚れてはいけない。待てないのは不安だからである。不安に理由はない。ひたすらに不安なのだ。不安が落ち着き失わせる。チャンスを待ちそこに精力を注ぐ方がよほど良い。流れが自分に傾くまで待つのである。

君達にも流れは必ずくる。今は見えない光が見える。漫然と待つのではなく、果敢に待て。努力して待て。成長する君達が作る流れを私達は、社会は待っている。



往復書簡

先輩から後輩へ

平成28年度
前期生徒会長
安達 浩平



鈴木さんが示された乱数表を見て驚いたのは、何も法則性がないような条件から描かれたグラフから、はっきりとした流れが見られたことです。この無作為に選ばれた、現時点ではわからない数を「未来」と考えてみると、様々な捉え方ができると感じました。

「一寸先は闇」という言葉があります。未来は推測できても完全に確実な予測はできません。「グラフは0付近をマークする」という鈴木さんの予想に反して、グラフは最初プラスの方向へ次にマイナスの方向へと大きく流れを作っています。私も同じように0付近を停滞すると予想していたので、非常に驚きを感じました。「一寸先は闇」という言葉通り、各個人の未来から、さらに大きく考えると世界情勢まで全くもってその先を予測できないということを示していると思いました。

しかし、私たちの生活の中には大きな流れとは別に、小さな流れがあるのではないかと感じます。例えば、部活の試合で劣勢の状況下に置かれていたとしても、ほんの小さなチャンスで流れをつかみ勝利することがあります。また、困難に思われたことが理由のわからないまま、うまくいくこともあります。私たちはその小さな流れの中にも生きており、さらに小さな流れが大きな流れを作っていると考えるといいのかもしれません。

当たり前のことですが、自分の将来を知ることはできません。そして、今自分が流れをつかんでいるとも思えません。しかし、大きな流れはいつかやって来るものだと思います。その大きな流れをうまくつかむためにはどうしたらいいのでしょうか。私が今やるべきことは、様々なことについて学び、経験していくことで流れをうまく受け止められるような強い土台(=人生の基礎)を作っていくことだと思います。私たちの人生は、ちょっとしたことで大きく変わるかもしれません。しかし鈴木さんも仰っているように、次世代の日本を支え、作っていくのは間違いもなく私たちです。私は、これを機会に自分の生き方や将来の夢についてよく考え、はっきりとした目標を持てるようにしたいです。

同窓生の活躍の連鎖に期待



一般財団法人
静岡経済研究所
常務理事
大石 人士 (48回)

最近、静岡県内の企業経営者にインターネットで検索する機会が増えた(会真)。私が勤めるシンクタンクの月刊誌に掲載するためである。地域のトップリーダーが、事業、顧客、地域、そして従業員に対して、

どんな思いで経営の取組みにあたっていいのか。魅力的な経営者が発する一つひとつの言葉には、いつもどこか感動がある。また、藤枝東高OBの方々が、お声掛けも含め、講演やセミナー、メディア出演などの依頼を受けることも多く、いろいろな人の「出会い」に感謝する日々である。

子供の頃から人前に出るのが苦手だった私が、どうしてこうなったのか。きっかけは東高時代の部活だった気がする。英語部に所属したが、当時は秋に開催されていた千南祭に向けてのみ活動する「エンゲイブシア劇部」のような存在で、中世の衣装をまとってメイクもして「ヴェニス」の商人などを英語で演じてきた。そこで、この8月に選挙を迎え振り返った。

さて、学生時代は東京で過ごし、就職は地元金融機関へ。ふるさとへの思いを強くしたのも、東高が母校だったからだろう(と)へ行って。藤枝東高の名前を出せば、サッカー談義から話が広がる。ふるさとを語るには欠かせない、魔法の言葉である。ベンチヤリや中小企業の育成に興味を持ち、地域企業や成長を願うつつ金融機関からシンクタンクへと勤めて30余年。まことにいろいろと関わらせていただき、静岡県だけでなく、藤枝、焼津、島田、吉田、川根本町などまさに地元、微力ではあるが貢献できたのかなと思う。

そして、いま取り組んでいるのは、学生の就職支援と企業の採用支援。地方における若者の減少が課題となっているが、魅力ある企業や地域づくりに、若者の存在が不可欠である。東高卒生ならではの優劣な同窓生が、大学を卒業後、あるいはキャリアを積んでから、その活字知識、経験をふるさとで活かして欲しい。もちろん、すでに各方面で活躍している素晴らしい同窓生がおられるが、こうした活躍を現役の東高生が見ることがよくできている。同窓会が、こうしてチャレンジの連鎖が続いていく。そんな風土のある藤枝東高であり、地域であることを願っている。

選挙権年齢の引き下げに思う



前静岡県副知事
大須賀 淑郎 (43回)

随想

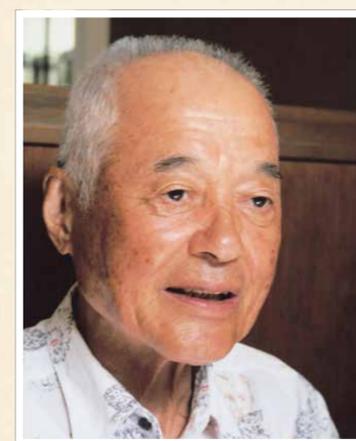
今年、20歳から18歳への選挙権年齢の引き下げが70年ふりに行われた。生徒の中に新たな有権者が誕生することとなった。高校の教育現場では、初の投票運動となる7月の参議院議員選挙に向けて選挙教育が盛んに行われたと聞いている。テレビや新聞では模擬投票の場面がよく報道されていたが、投票先の判断に関しては、いかに選挙教育が行われたのだろうか。私としては非常に興味深く思っている。

今年、20歳から18歳への選挙権年齢の引き下げが70年ふりに行われた。生徒の中に新たな有権者が誕生することとなった。高校の教育現場では、初の投票運動となる7月の参議院議員選挙に向けて選挙教育が盛んに行われたと聞いている。テレビや新聞では模擬投票の場面がよく報道されていたが、投票先の判断に関しては、いかに選挙教育が行われたのだろうか。私としては非常に興味深く思っている。

今年、20歳から18歳への選挙権年齢の引き下げが70年ふりに行われた。生徒の中に新たな有権者が誕生することとなった。高校の教育現場では、初の投票運動となる7月の参議院議員選挙に向けて選挙教育が盛んに行われたと聞いている。テレビや新聞では模擬投票の場面がよく報道されていたが、投票先の判断に関しては、いかに選挙教育が行われたのだろうか。私としては非常に興味深く思っている。

今年、20歳から18歳への選挙権年齢の引き下げが70年ふりに行われた。生徒の中に新たな有権者が誕生することとなった。高校の教育現場では、初の投票運動となる7月の参議院議員選挙に向けて選挙教育が盛んに行われたと聞いている。テレビや新聞では模擬投票の場面がよく報道されていたが、投票先の判断に関しては、いかに選挙教育が行われたのだろうか。私としては非常に興味深く思っている。

今年、20歳から18歳への選挙権年齢の引き下げが70年ふりに行われた。生徒の中に新たな有権者が誕生することとなった。高校の教育現場では、初の投票運動となる7月の参議院議員選挙に向けて選挙教育が盛んに行われたと聞いている。テレビや新聞では模擬投票の場面がよく報道されていたが、投票先の判断に関しては、いかに選挙教育が行われたのだろうか。私としては非常に興味深く思っている。



1962年4月から1967年3月まで在籍

恩師を訪ねて

塩沢 伸介先生

東高に在籍したのは、1回目の東京五輪があった1964年(昭和39年)を挟んだ5年間だけだ。だが、短かった分、実に濃密な時を過ごしたと実感している。その証拠に、間もなく83歳となる今も同窓会員名簿を常に身近に置き、事あるごとに教え子の動向を、あるいは存在を確認することを怠らない。

担任するまでサッカー部の顧問を務めた。担任当初は柔道部と関わっていたが、サッカー部を率いていた長池實氏(故人)から手伝ってくれないかと声が掛かった。それがきっかけだった。顧問1年目の62年度、サッカー部は冬の高校選手権で初の全国制覇をやつてのけた。「私自身にとっても全国一は初めての経験で、感動を味わわせてくれた。同時に、サッカーに寄せる周囲の期待の大ききも身をもって感じたという。

担任するまでサッカー部の顧問を務めた。担任当初は柔道部と関わっていたが、サッカー部を率いていた長池實氏(故人)から手伝ってくれないかと声が掛かった。それがきっかけだった。顧問1年目の62年度、サッカー部は冬の高校選手権で初の全国制覇をやつてのけた。「私自身にとっても全国一は初めての経験で、感動を味わわせてくれた。同時に、サッカーに寄せる周囲の期待の大ききも身をもって感じたという。

担任するまでサッカー部の顧問を務めた。担任当初は柔道部と関わっていたが、サッカー部を率いていた長池實氏(故人)から手伝ってくれないかと声が掛かった。それがきっかけだった。顧問1年目の62年度、サッカー部は冬の高校選手権で初の全国制覇をやつてのけた。「私自身にとっても全国一は初めての経験で、感動を味わわせてくれた。同時に、サッカーに寄せる周囲の期待の大ききも身をもって感じたという。

身近な法律家を目指して



藤枝のぞみ法律特許事務所
弁護士
宮田 逸江 (65回)

同窓会誌へ高橋をさせていただくにあたり、40年前の高校時代を懐かしく思い出しています。高校では、演劇部に所属し、旧体育館ステージ横の部屋に入りりたり、毎日、延々とおしゃべりしてました。藤枝東高の自由な校風のおかげで、高校時代のびのび過ごせたことは、高校で得た友人とともに、私の礎となっています。



藤色のユニフォーム
日本サッカー協会
審判委員長
小川 佳実 (51回)

4歳年上の兄が藤枝東高サッカー部に入部し、2・3年時に全国高校サッカー選手権に出場しました(結果は2年連続準優勝)。その時、兄が自宅を持ち帰った新しい藤色のユニフォームに袖を通した。これは45年経った今でも鮮明に覚えています。この「藤色のユニフォーム」は、藤枝東高の歴史を象徴する存在です。

4歳年上の兄が藤枝東高サッカー部に入部し、2・3年時に全国高校サッカー選手権に出場しました(結果は2年連続準優勝)。その時、兄が自宅を持ち帰った新しい藤色のユニフォームに袖を通した。これは45年経った今でも鮮明に覚えています。この「藤色のユニフォーム」は、藤枝東高の歴史を象徴する存在です。

4歳年上の兄が藤枝東高サッカー部に入部し、2・3年時に全国高校サッカー選手権に出場しました(結果は2年連続準優勝)。その時、兄が自宅を持ち帰った新しい藤色のユニフォームに袖を通した。これは45年経った今でも鮮明に覚えています。この「藤色のユニフォーム」は、藤枝東高の歴史を象徴する存在です。